研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-110	A-730	21-057	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　三浦克之

題名（原題／訳）

Trajectories of alcohol consumption in relation to all-cause mortality in patients with cardiovascular disease: a 35-year prospective cohort study

循環器疾患患者における全死亡に関連するアルコール摂取の軌跡：35 年間の前向きコホート研究

執筆者

Chengyi Ding, Dara O'Neill, Annie Britton

掲載誌

Addiction. 2022 Jul;117(7):1920-1930. doi: 10.1111/add.15850.

キーワード	PMID
アルコール、循環器疾患、過去飲酒者、縦断的、死亡率、軌跡	35188300

要　旨

目的：飲酒と循環器疾患（CVD）患者の予後に関して、飲酒行動における縦断的検討はほとんどない。本研究は CVD 患者における飲酒の軌跡と全死亡リスクとの関連を調査した。

方法：Whitehall II Study は 35-55 歳の英国公務員 10,308 人を対象とした前向きコホート研究であり、1985-88 年にベースライン調査が実施された。本研究は非致死的 CVD（冠動脈性心疾患/脳卒中）イベントを発症した 1,306 人を対象とした。CVD 発症前の直近と発症後のすべての段階で、最大８回飲酒量の反復測定を行なった。飲酒の軌跡は、集団軌跡モデルを用いて 6 グループ（継続的禁酒者、過去飲酒者、適量（14 単位/週以下）飲酒者、多量飲酒（14 単位/週以上）から適量に減らした飲酒者、安定した多量飲酒者、不安定な多量飲酒者）を同定した。飲酒の軌跡グループに関連する全死亡のハザード比（HR）は、Cox 比例ハザード回帰モデルを用いて推定した。モデル１は年齢、性、摂取量評価間隔で調整、モデル２は民族性、社会経済的地位、健康行動、医療状況を追加調整、モデル３は最後に飲酒評価を受けた段階の共変量（喫煙、身体活動、食行動、心血管薬、糖尿病、高血圧）についても調整を行った。

結果：患者の最後の飲酒評価から追跡（中央値 5 年間）期間中、全死亡者は 380 人であった。適量飲酒者と比較して、過去飲酒者は共変量調整後の死亡リスクが高値を示した（モデル 3 ; HR = 1.74, 95%信頼区間= 1.19-2.54）。継続的禁酒者、多量飲酒から適量に減らした飲酒者、安定した多量飲酒者、不安定な多量飲酒者では、死亡リスクの有意差はなかった。患者の最後の飲酒状況調査の飲酒情報のみに基づく横断的解析では、禁酒者、過去飲酒者、多量飲酒者と適量飲酒者の死亡リスクに有意差はなかった。

結論：総死亡率に対する適量飲酒の保護効果は認めなかった。CVD 発症後に禁酒した過去飲酒者は、継続的な適量飲酒者よりも死亡リスクが高かった。CVD 発症前の自己評価による健康状態が悪い割合が高く、追跡調査中の健康状態悪化の強さが影響した可能性がある。